

研究結果報告書

日本の宮中楽舞の源泉を探って
-高麗楽くしんそりこ>を中心に-

本研究はしんそりこ（＝「進曾利古」）の源泉を探るために、より根本的な質問から再出発した。第一に、「進曾利古」の記録に酒で有名な百濟人、須須許理が登場する理由は何であろうか。第二に、須須許理という名前の持つ多重の意味は何か？第三に、「進曾利古」の衣裳、舞具、舞の動作はどのように構成され、それらの持つ特徴や意味は何であるか。第四に、結果的に「進曾利古」は何に由来しているのか？第五に、「進曾利古」と百濟との関連性を推論できるものには何があるか。

第一に、須須許理が「進曾利古」のモチーフとして登場することができたのは、須須許理が優れた酒造術を持っていたからである。

第二に、須須許理という名は酒と水を同時に象徴する。古代において酒と水は神に捧げる供え物として同じような役割を果たした。須須許理は神の領域に属した酒やそれと等しい価値を持っていた水を同時に象徴していたのである。

第三に、「進曾利古」は四人舞で公演され、雑面を着用する。衣裳は右方襲装束を着る。舞具としては白楚を使う。『楽家録』によれば白楚は桴と白糸で構成され、桴は白楚を、白糸は水を象徴するという。「進曾利古」は白楚を手にとって舞うが、これは砂水の法を表すという。舞の動作を観察してみると伏肘や掻き合いが主を成していることが分かる。特徴的なのは耳の辺で岐呂利をする動作であるが、これは「進曾利古」の一つの特徴と言える。

第四に、第一から第三までを考察した結果、「進曾利古」は井戸で行われる祭祀から始まった楽舞であったとみられる。旧百濟地域には 11ヶ所の井戸の遺跡が残っていて、国家的な規模の祭祀が行われたと思われる遺物が数多く出土した。のみならず旧百濟地域の靈巖では厄払い及び豊年と豊漁を願う「井洞井戸祭」が行われている。古代には清らかな水を神聖に思う信仰が各国に深く根付いていたのである。更に韓半島の古代語を基に調べると「曾利古」とは「東の井戸(泉)の城」或いは「東の泉の谷」と解析することが出

来る。「soriko」とは「sɛ erikol>sɛ irikol>sɛ rikol>sorikol>soriko」の過程を経てその音が定着していったのである。

第五に、「進曾利古」と百済との関連性を推論できるようにするものには白楚がある。韓半島には古い時代から使われてきた巫具シンカル(神刀)がある。シンカルは小さい刀に白糸を伸ばしたものである。祭祀の前に行われるブジョングッでは浄化のためにシンカルの白糸に水をつけてあちこちに水を撒き散らす。桴に白糸が垂れている模様はもちろん、浄化の役割や採物として使う方法など「進曾利古」の白楚は旧百済地域のシンカルと相関関係があると判断される。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「祭儀的な性格の日本宮中楽舞の理解」
(朴泰圭、第4回東アジア伝統文化院国際学術セミナー、2013、12、27、Sun-Kyung図書館大講堂)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「日本の宮中楽舞の原泉を探って-高麗楽「進曾利古」を中心に-」
(朴泰圭、『日本文化研究(50)』、2014、04、15)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)